

六花  
2



2019

りっかはいくかい

鎮

若 狭

山 田 六 甲

初点前安騎生自然じねんの茶碗もて  
大屋根に寿寿と声あり初雀  
愚庵には炉はなけれども初点前  
恐縮の極み賀状をいただいて  
七草や水に映せる顔笑んで  
仏の座洗ふ七種なぐさの水をもて  
木端にも紅の年輪斧(よき)始  
米澤の女将しやきしやき冬林檎  
その時は寒く若狭の沖にゐし

悼・遠藤若狭男さん。12月16日、日本海フエリ

寒明けの貌にもどりぬ城の石  
それとなく相歩み寄る冬薔薇  
冬薔薇刺白くして固くあり  
霜の石変転を経てここに坐す  
冬薔薇このままに終れるもんか  
凍雲の一角を鳶開きけり  
石垣を冬日の影の這ひにけり  
二三粒地藏手水の実南天  
逆さまになつて水呑む寒の鳩  
畦焼くと押部おしべの谷に立つ煙  
白鳥の改元を待つ首を伸べ

藤本安騎生（あきお）さんの焼いた萩茶碗は安騎生さんの俳人協会賞内祝いだっと思ふ。その茶碗で毎日御飯や茶漬けを頂くし、濃茶や薄茶の点前にも使う。夏は涼しいし、冬は暖かい手ざわりで本当に自然体のよろしさを教えてくれる。茶碗の内膚には筆跡やさしく「自然」と「安」が入れてあり、その自然という教えを観ながらいただく。安騎生さんに昔「異造りの下見に来たるつがひかな 六甲」の句についてお褒めのお手紙を頂いて、恐縮した。何かの会で初めてお会いした時、すごく親しげな笑顔をいただき、はて？と思つたことがある。ながらくそのことで、もやもやとしていたが、のち「狩」で同時期に投句していた仲間だったことが分かった。あるとき「六花」に坪内稔典さんが安騎生さんの作品について良くないことを書いたことがある。しかし安騎生さんはニコニコして意に介されなかつた。そればかりか陰で六甲を支えてくださった、安騎生さんは東吉野村の人となつて2014年3月25日天寿を全うされた。

旧知との旅は小春の近江かな  
浮寝鳥群れの端より崩れけり  
みづうみの闇に時雨を聞いてをり  
飛ぶたびに色の褪せゆく飛蝗かな  
伸べる手の先へさきへと雪蛭  
茶の花の武蔵が庭へつづきをり  
茶の咲いて友の訃を知る日となりぬ  
小走りに坂下りゆく秋遍路  
焼餅の餡の噴きだす紅葉茶屋  
六千の歩を置いて来し紅葉寺

水に触れそよりともせぬ枯柳  
電柱にビラのぼたつく雁渡し  
黄落や巫女の丈越す竹箒  
道岐れても黄落のとどまらず  
落葉搔く巫女ひとりにはむごき嵩  
川涸るる蛇籠にのぞく石の数  
風鎮のかすかにゆるる隙間風  
蒲団干す窓にまぶしき直射光  
牡蠣の酢にむせて会話のときれけり  
雲切れてぽつんと覗く夜寒星

# 秋祭終へてまつたき空の朝

善野 行

秋祭終へてまつたき空の朝  
 引き寄せて枝冷たかり帰り花  
 町へ出る朝のひかりに帰り花  
 ゆく秋や猿沢池の松の影  
 咲き切つて十月桜つぶらなり  
 心地よく酔ひ帰るさの忘れ花  
 初時雨御番屋敷の土間を抜け  
 鴨の群数へて一羽増えにけり

あきまつりおえてまつたきそらのあさ ぜんこのう

利まつりの間、空を借りて幟や旗や飾り  
 が終わったので里の衆が、幟や飾を取り  
 外し元通りの空にして返した。村の鎮守  
 の神様の祀りとはいえ、天空をつかさど  
 る神様のもの。元通りの何も無い全き空  
 にしてお返ししたのだ。返す時お神酒を  
 天に指で撥ねて感謝したのであろう。「ま  
 た来年豊かな実りをいただきますように」  
 と紙垂を振って「天清浄、地清浄、  
 内外清浄、六根清浄、戒ひたまふ（古典  
 文学全集「祝詞」）と祝詞を上げ伏した  
 のであろう。てんしゃうじやう、ちしや  
 うじやう、ないがいしやうじやう、りつ  
 こんしやうじやう。きよめたまふ、はら  
 ひたまふ。

雪卿集 せつけいしゅう

志方 章子

升田ヤス子

露草の中より澄みし声ありぬ  
制帽をかむれば凜々し秋の空  
体育の日や体育の真似ごとす  
秋草の刈られし古墳威を正す  
晩秋やかつては映画通の我れ  
前川に障子洗ひし日のありし  
鉄管の口より白粉花覗く  
菊膾食みて母ぬし頃のこと

ふるさとやこつと頭を打つ柞の実  
ホスピスの玻璃に秋日の濃かりけり  
箒目の流れをゆるく落葉掃く  
墨染の僧の寡黙や落葉掃く  
ハンカチの木の紅葉づりて柄違ふ  
万両の段々の赤五輪塔  
遊行柳まで魯田を突つ切れり  
魯田の影の瘦せたる柳かな

出口 誠

藤生不二男

青空に赤くこたへし照葉かな  
木の実降るばらばらと降る一つ降る  
川沿ひに広がる紅葉箕面山  
野仏のとなりに秋を惜しみけり  
くすみても紅葉は紅葉箕面山  
糲殻のけぶりの中の焰かな  
滝の白紅葉の色をひきたてぬ  
昼過ぎて薄日の影のしぐれけり  
滝に日の当りて紅葉影を成す  
ほのかにも朱にとがれる冬芽かな  
もみぢ葉にならぬ木もあり冬の昼  
みづうみのざつとかぞふる鴨の数  
いくつかの赤きともしび寒椿  
笹鳴の移りし方へ眼をやりぬ  
一本の樹にさまざまの冬紅葉  
冬紅葉眼下はるかに播磨灘



永田万年青

善野 行

晩秋や車窓の吾の老けてゐし  
釣り人の水面見てゐる冬鷗  
植込みに紛れてゐたる帰り花  
御陵の立入禁止帰り花  
二度咲きの色淡くして凜として  
水澄むや帯状に魚遡上して  
一木に一輪づつの冬薔薇  
散策の日かげの落葉やはらかし

秋祭終へてまつたき空の朝  
引き寄せて枝冷たかり帰り花  
町へ出る朝のひかりに帰り花  
咲き切つて十月桜つぶらなり  
心地よく酔ひ帰るさの忘れ花  
初時雨御番屋敷の土間を抜け  
ゆく秋や猿沢池の松の影  
鴨の群数へて一羽増えにけり

谷口一献

落柿舎の天に撒かれし柿紅葉  
化野の河原にやさし小春かな  
人生の今どの辺り小春かな  
熱爛や妻への愚痴も一寸だけ  
冬めきて漢方薬店妖しめり  
鍋底を占めて伊勢えび威張りけり  
冬ざるる地蔵の貌の薄き影  
側に居てくるる連れあり小春空

住田千代子

霜降の大屋根に日の静かなり  
みささぎを訪ねし釣瓶落しの日  
浮くものを岸に片寄せ水の秋  
さざ波の風を集めて萩の花  
オリーブの枝に一粒づつ揺るる  
鋸屑の舞ひぬる中の秋手入れ  
稜線を明るうにして初時巾  
鴟目和からすの羽の落ちてをり

# 雪樹集

廣畑 育子

赤松有馬守破天龍正義

みささぎの端に安宿びわの花

帰り花水に流せる事の有り

草じらみ先行く人の裾にかな

舞子坂ひいふうみいと戻り花

陪塚を覗かばローズマリーの香

舞子浜塩害の中返り花

そよごの実御陵の風にそよがざり

刑務所の塀を乗り出す帰り花

てらてらと廃線跡になつめの実

恋人？いえ変人の狂ひ花

冬兆す朝の畑に鴉来て

神の留守移民難民ひたひたと

延川五十昭

平居 滯子

ひとひらとなりて流るる秋の雲

忌日過ぎ伽羅の香りと菊の香と

大栗をほほぼる今日は誕生日

絵はがきの余白そこはかたなく秋思

病床に臥せてをりたる秋思かな

子等散つて拾ふ木の実のあれやこれ

利神城しのぐ高さや大銀杏

朽ち橋のいよよ短く秋の暮

二股も三股もありて根芋かな

十字架に見えし水門濠立冬

干し柿を含めば遠き昭和かな

行く秋やあまた埴輪の眠る丘

六<sup>り</sup>花<sup>か</sup>集<sup>し</sup>

2月到着順

大内 幸子

天高く動かぬ雲の下に生き  
今年きりと思ひつつも大根蒔く  
修正液旧かなにして初炬燵  
廃校も駅舎も霧に隠れけり  
峠越へ棚田百選柚子たわわ

延川 笙子

静けさや背景は湖返り花  
石段を喘ぎ登れば返り花  
惜別の歌流れけり返り花  
心病みて癒しの旅や返り花  
遠路来し友なごませり返り花

# 螢雪譚

山田六甲



出口 誠

青空に赤くこたへし照葉かな

青く澄んだ空には紅葉も照葉して  
応えようと光っている。空が折角青  
く、もてなしてくれているのだから、  
こちらは紅葉してお応えしましょう  
という。この句には誠俳句の進化を  
見る。かれは実直だから直線で句を  
詠む。だが、ここでは柔軟に照葉が  
青空に応えて紅葉しましたよ、と去  
来の「月の客」のように呼びかけた  
のである。俳句が面白くなるのは  
30年ほどはかかる。今その面白さ  
が解ってきたのである。

藤生不二男

木の実降るばらばらと降る一つ降る

苦しいときのリフレイン頼み。  
木の葉の降り方のリズムをじつと聞  
いている。オノマトペ（擬音語）の下  
五でリズムを整えるというか、言い訳  
のように据えるのは最期に締めを欲し  
がる人間の性のようなのである。締めがな  
いと気持ち悪いのであろう。お酒のあ  
との老麵のように。

永田万年青

水澄むや帯状に魚遡上して

帯状になって魚が遡上するのを主宰  
は兵庫県の山奥、杉原紙漉場を見た。  
水が澄むと川底まで透き通るもとより  
冷たい水の流れだから、魚影も黒く鮮  
明に見えるのである。魚の見え方で紙  
を漉く季節の到来を知るのである。こ  
のころ楮を川底に浸けて晒す。